

交易条件の悪化で 農家経済には厳しい

—ことしの農業観測から—

農林水産大臣
官房調査課

高橋 善 一

農林水産省は、農業生産者と関係者に対して、農産物の生産・出荷と資材購入等に関する合理的な計画に資することを目的とした情報提供を行うため、農林水産統計観測審議会の審議を経て、昭和55年度農業観測を8月に公表した。

以下は、農業をとりまく情勢および、農業経済の見通しについての概要である。

1. 農業をとりまく情勢

(国内経済)

54年度の国内経済は個人消費、民間設備投資、輸出の増加等により、安定的な成長を示した。

55年度の農業観測は政府経済見通しを前提として行った。つまり55年度の国内経済については、経済成長率は鈍化するものと見込まれている。また卸売物価は上昇率が鈍化するものの上昇が続き、消費者物価は卸売物価上昇の影響が次第に波及し、上昇率は高まるとみられる。

(農業就業人口)

52、53年度と、減少率が鈍化していた農業就業人口は54年度には、雇用情勢の改善傾向等を反映して、4.9%の減少となった。

55年度は、雇用情勢は基調として、大きな変化がないとみられていることや、農業就業者の引退等自然減が見込まれることからみて、前年度に比べわずか、ないしやや減少(3%前後)するとみられる。

(農地のかい廃面積)

農地のかい廃面積は、52年以降ほぼ横ばいで推移しており、54年(53年8月~54年7月間)には2万2,900haであった。

55年度は、民間設備投資、住宅投資の動向等からみて

ほぼ横ばいとみられる。

(農業生産資材価格)

54年度の農業生産資材価格は、原油価格の上昇、円安、一般卸売物価の上昇等の影響から上昇を続け、年度中における上昇は、かなり大きなものとなり、年度間では前年度を15.8%上回った。

55年度については、コスト面では、海外原材料価格の動向等に、不確定な要因はあるが、総じてコスト要因は前年度に比べれば小さなものとみられること等を考慮すれば、資材価格(総合)の55年中における上昇は、比較的緩やかなものとなり、やや上昇する程度と見通される。なお、これを年度間でみれば、前年度をかなりの程度上回るとみられる。

(海外農産物需給)

(1)1979/80年度の世界の穀物生産は、アメリカは豊作となったがソ連等で減産となり、前年度を下回った。また在庫は減少したが比較的高水準なものとなっている。

大豆は、生産が史上最高であった前年を更に上回り、在庫も大幅な増加が見込まれている。

(2)1980/81年については、穀物生産は、アメリカで熱波による飼料穀物の減産はあったが、ソ連等では前年より増加するとみられ、全体では、前年度を上回るものとみられている。また、消費の動向や、現在の在庫水準を考慮すれば、穀物需給は、現状よりひっ迫する可能性は小さいものとみられるが、なお、今後の主要国の天候・作柄の推移等には、十分注意する必要がある。

大豆についても、今後の天候・作柄いかにによる面が大きいが、在庫の水準が高いこと等からみて、当面、需給ひっ迫の可能性は小さいものと見込まれる。

穀物および大豆の国際価格は、本年6月末以降、堅調な水準で推移しており、当面大きく上昇する可能性は小さいものの、これらの価格動向には、今後、十分注意していく必要がある。

2. 農業経済の見通し

(農産物需要)

近年の食料消費は、個人消費の緩やかな伸びのなかで伸び悩みの状態が続けている。

表-1 55年度農業観測総括表

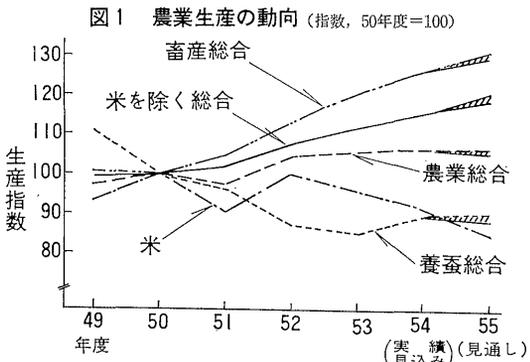
	単 位	実数又は指数			対前年度増減(Δ) 率(%)			55年度見通し
		52年度	53	54(概数)	52年度	53	54(概数)	
実質飲食費支出	45年価格(千億円)	181	186	191~192	2.0	2.5	3~3.5程	2.5~3%程度の増加
農業生産	50年度=100	104.8	106.0	106.5	7.7	1.1	度 0.5	ほぼ前年度並み
農産物価格	50年度=100	108.7	113.4	118.0	Δ 0.7	4.3	4.1	前年度をわずかに上回る
農業生産資材価格	50年度=100	107.1	104.4	110.5	2.4	Δ 2.5	5.8	年度中はやや上昇し、年度間では前年度をかなりの程度上回る

55年度の食料消費については、実質民間最終消費支出は、前年度の伸びを下回ると見込まれていること、食料品の消費者価格は、おおむね安定的に推移すると見通されること等を考慮すれば、実質飲食費支出の伸びは、前年度の伸び(3~3.5%程度)を下回る2.5~3%程度とみられ、農産物需要も伸びが鈍化して、緩やかな増加にとどまるものと見込まれる。

(農業生産)

54年度の農業生産は、耕種生産については麦類、みかんが大幅に増加、春野菜、夏秋野菜も増加したが、米が4.9%減少したほか秋冬野菜、茶等も減少し、総合では減少した。一方、畜産生産については増勢鈍化ながら4.5%程度増加、繭生産は4.8%増加した。以上の結果、農業生産総合は0.5%程度増加した。

55年度は、耕種生産については、麦および大豆をはじめ、野菜等の増加が見込まれるが、米がかなりの程度減少するとみられることなどから、わずかな減少が見込まれる。畜産生産については、畜種により異なるが、肉豚と



殺頭数の伸びの鈍化等から、全体としても伸びが鈍化し3%程度の増加が見込まれる。また、繭生産は、ほぼ前年並みと見込まれる。以上から、米を除く農業生産は、3%前後の増加が見込まれるが、農業生産総合は、米の減産により、ほぼ前年並みと見込まれる。

(農産物価格)

54年度の農産物価格は、農産物需給が一般的に緩和基調が続いたことから、弱含み傾向が続き、年度後半には野菜価格の高騰からかなりの上昇となったものの年度を通じては前年度を4.1%上回るにとどまった。

55年度についてみると、個人消費の伸びの鈍化が見込まれるなかで、農産物需要も、前年度に比べ伸びが鈍化し、引き続き緩やかな増加にとどまるものとみられる。一方、供給面では、畜産生産は増勢が鈍化し、3%程度の増加と見込まれる。また、果実は、裏年に当たるみかんは減少するが、りんごはかになり大きく増加し、野菜は前年不作となった秋冬野菜がかなり増加するとみられるなど、米を除く生産は、3%前後の増加が見込まれる。以上の需給動向からみて、品目により差はあるが、需給面からの価格上昇要因は、乏しいものとみられる。

55年度の農産物価格は、生産資材価格の上昇等によるコスト面からの上昇要因はあるが、総じて、需給面からの上昇要因は乏しいものとみられ、農産物総合では、わずかな上昇(2~3%程度)と見通される。

(農家経済)

54年度の農家経済(全国1戸当たり平均)についてみると、農業粗収益が小幅な増加(1.5%)にとどまっているなかで、農業経営費が資材価格の上昇からかなり増加(9.3%)したため、農業所得は前年度を下回った。他方農外所得は8.4%の増加となった。以上等から、農家総所得は前年度比5.5%増と伸びが鈍化した。

55年度において、農業所得をめぐっては、①農業総産出額は、農業生産および農産物価格の見通しからみて、わずか、ないしやや増加する程度と見込まれる。②物的経費は、資材の投入、価格、固定資本の償却等の状況からみて、やや、ないしかなりの程度の増加と見込まれる。

以上から、補助金を含めた生産農業所得は、全般的に過剰基調にある農産物の価格動向や、農業生産資材価格の動向等を反映して、前年度並み、ないし、わずかな減少と見通され、1戸当たり平均でみた農業所得は、補助金を含めると、ほぼ前年度並みとみられる。

他方、農外所得は、最近の雇用および一般賃金の動向等からみて、ほぼ前年度並みの伸びと見込まれる。また農家総所得では、鈍化をみせた前年度の伸びを、やや上回る伸びが見込まれる。

表-2 昭和55年度主要農産物価格の見通し (単位: 卸売価格円/kg)

	実数又は指数			対前年度増減(Δ)率(%)			55年度見通し
	52年度	53	54(概数)	52年度	53	54(概数)	
牛肉(乳おす)	1,251	1,313	1,457	Δ 5.0	4.9	11.0	前年度をやや下回る
豚肉	735	682	612	Δ 0.8	Δ 7.2	Δ 10.3	前年度をやや上回る
プロイラ	319	288	284	Δ 7.3	Δ 9.7	Δ 1.4	前年度をやや上回る
鶏卵	267	227	251	Δ 3.8	Δ 15.0	10.3	前年度をかなりの程度上回る
みりん	106	137	99	Δ 21.6	28.9	Δ 28.1	前年同期を大幅に上回る
ぶどう	189	272	283	Δ 18.1	44.1	3.9	前年同期をかなりの程度下回る
野菜	486	514	458	8.0	5.8	Δ 10.9	前年同期をわずかに上回る
繭	125	129	157	Δ 5.3	3.2	21.7	春野菜は前年同期をかなり大きく上回り、夏秋野菜はやや上回り、秋冬野菜は大幅に下回る
繭	1,944	2,268	2,178	6.8	16.7	Δ 4.0	前年度をわずかにないしやや上回る